黒毛和種去勢牛の肥育前期における濃厚飼料給与割合

畜産試験場　肉用牛担当

県のとよのくに体系は、肥育前期粗飼料多給型マニュアルとなっているが、肥育農家によっては肥育前期から濃厚飼料の増給を図る事例も見受けられる。

そこで、黒毛和種去勢牛の肥育前期６か月間の濃厚飼料給与割合が肥育成績に及ぼす影響について検討したので紹介する。

【普及したい技術のポイント】

①肥育前期６か月間の濃厚飼料からのTDN給与割合を平均75%とする給与方法が、肥育前期濃厚飼料多給法に比べ乾物摂取量及び枝肉成績が良好である。

②75%給与法は肥育月齢１か月目の濃厚飼料からのTDN給与割合を65%とし、順次漸増させ６か月目に85%となるよう給与する必要がある。

③この給与法は現行のとよのくにマニュアルより肥育素牛導入時の濃厚飼料給与量が多く、子牛の育成マニュアルの濃厚飼料給与量との整合性を図りやすい。

【試験区の設定】

とよのくに飼料と大豆粕を用い、試験区は各区とも肥育前期６か月間の飼料中CP濃度を15%とし濃厚飼料からのTDN給与割合を平均75%区（１区）、80%区（２区）、85%区（３区）に設定した。肥育中期以降は濃厚飼料飽食とした。

【乾物摂取成績】

肥育前中後期毎の１日１頭当たり乾物摂取量を比較すると１区が全期間良好な摂取を示し、３区は肥育中期の摂取量が低下する傾向が見られた（表１）。

表1　乾物摂取量(1日1頭平均 単位:kg

	前期	中期	後期
1区	7.97	8.34	7.69
2区	7.95	8.25	7.42
3区	7.83	7.61	7.69

【増体成績】

肥育前期の増体は３区、２区、１区の順に良好であったが、肥育中期は１区、２区、３区の順と逆転し、全期間増体量はほぼ同程度であった（表２）。

【枝肉成績】

１区がロース芯面積が大きく歩留基準値が良好な成績となった。有意差はないものの１区がBMS.NOも良好な成績を示し４等級以上率は83.3%（５頭／６頭）であった（表３）。

【とよのくにマニュアルとの比較】

現行のとよのくにマニュアルは肥育前期粗飼料多給体系で、肥育素牛導入後濃厚飼料からのTDN給与割合は50%程度から始まっているが、この方式では導入時濃厚飼料からのTDN給与割合65%から開始し６か月目で85%まで漸増することとなる（図１）。

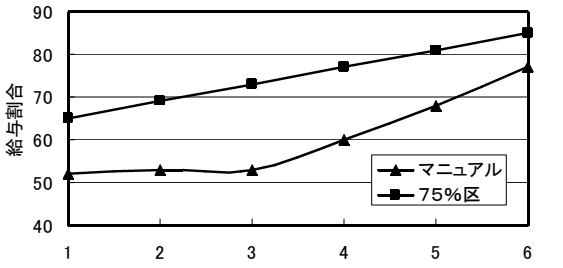

図1　濃厚飼料からのTDN給与割合

表２　増体成績　　単位：kg

区	項目	開始時 0	肥育前期 （188日）	肥育中期 （184日）	肥育後期 （121日）	全期間増体 （493日）
１区（n＝６）	体重	300.8	450.7	647.2	717.3	416.5
	DG		0.80	1.07	0.58	0.84
２区（n＝６）	体重	302.0	459.5	641.3	705.5	403.5
	DG		0.84	0.99	0.58	0.82
３区（n＝６）	体重	298.2	461.8	627.5	704.8	406.6
	DG		0.87	0.90	0.64	0.82

表３　枝肉成績　　単位：kg、cm2、cm

	枝肉重量	ﾛｰｽ芯面積	ﾊﾞﾗ厚	皮下脂肪厚	歩留基準値	BMS.No	BCS.No	しまり	きめ
１区	450.4	58.7Aa	7.9	2.9	74.2A	5.5	3.8	4.0	4.0
２区	450.8	49.5B	7.9	3.1	72.7B	4.8	3.8	3.8	3.7
３区	449.1	50.3b	7.9	3.2	72.7	4.2	3.7	3.3	3.7

☆異符号間に有意差あり(AB：p＜0.01 ab：p＜0.05)